

倉田 悟* シダ類ノート (25)

S. KURATA : Notes on Japanese Ferns (25).

(86) **ムラサキベニシダ** 薩摩の紫尾山を type locality として1932年に田川基二氏の記載されたもので、難解な羊歯の一つである。伊藤洋氏はこれをベニシダの変種とされたが、同氏がムラサキベニシダと考えられたのは大部分ホコザキベニシダであることが、東大理学部の腊葉を見ると理解できる。また、緒方正資氏(植物研究雑誌16巻32頁, 1940年)も、そこに掲げられた標本写真に見る通り、同様の誤解をされているようである。成程、ホコザキベニシダであればベニシダの変種とする処置はうなずけるが、真のムラサキベニシダはヌカイタチシダモドキに近縁のものである。田代善太郎氏採集のタイプ標本は、下部羽片が葉軸から殆んど直角に出ており羽片は無柄に近く、この2性質はヌカイタチシダモドキにほぼ一致する。しかし、上部羽片は斜上し、葉柄・葉軸・羽軸等が鮮かな淡紅紫色を呈し、ソーラスは中間生、鱗片が黒色である等の性質により、ヌカイタチシダモドキの典型品とは異つている。更に、ソーラスは辺縁に寄り、羽片の柄が明らかで下部羽片も基部から斜上する一段と理解しやすいムラサキベニシダがある一方、ソーラスの位置も中肋に寄り、特異な紅紫色が余り著しくない個体がある。また、ヌカイタチシダモドキにおいても鱗片が黒色となり、ソーラスは中間生、若葉の紅紫色の著しいものが時に見られ、特に南九州の肥薩国境附近の低山地には、両者の何れとも判断のつきかねる株が次から次と出て来る。私は結局、ムラサキベニシダはヌカイタチシダモドキの変種とすべきものと考え。なお、ムラサキベニシダの包膜は中央が紅色をなす個体が多いが、全く灰白色をなす個体もあり、ヌカイタチシダモドキの包膜は中央が紅色をなすものを典型とするが、むしろ灰白色の株が多い。また、ムラサキベニシダの最下羽片の下向第1小羽片は第2小羽片よりタイプ標本では短い、長い個体もある。検し得たムラサキベニシダの標本産地は、紀州東牟婁郡白見国有林(伊藤良, 1960年; 倉田悟, 1960年)、肥前長崎 (FAURIE no. 469, 1913年, 東大理学部所蔵)、肥後天草下島福連木(倉田, 1960年)、肥後人吉市段塔(乙益正隆 no. 5628)、肥後水俣市大関山(城戸正幸 no. 2499)、同無線山(倉田 no. 1991, 1958年)、同久木野大川(倉田 no. 4291, 1958年; 倉田, 1960年)、薩摩大口市布計(倉田 no. 2035, 1958年)、同布計一木地山(城戸正幸 no. 3423)、同上場(倉田 no. 1077, 1960年)、同田代(倉田 no. 2142, 1958年; 倉田 no. 78, 1959年)、同崎山南平(倉田 no. 8631)、薩摩紫尾山(滝一郎, 1951年; 城戸, 1958年)、薩摩出水市定ノ段(倉田 no. 815, 1957年)、大隅高隈山(倉田 no. 942, 1957年)、大隅屋久島楠川林道下部(倉田 no. 364, 1956年)、同小杉谷ウイルソン株(児玉親輔1923年; 岡国夫 no. 10074)、同荒川(倉田, 1956年)、同本富岳(川畑政親 no. 425)、同鯛ノ川(川畑 no. 243; 樋口雄一 no. 2526; 川辺恭

* 東京大学農学部森林植物学教室 Institute of Forest Botany, Faculty of Agriculture, University of Tokyo.

祐 no. 4918), 同尾ノ間一耳岳 (岩槻邦男 no. 3159) 等である。また、原田利一氏が伊豆半島で採られたというムラサキベニシダの標本を志村義雄氏は所持されているが、産地に多少の疑問がある。

(87) **クロミノイタチシダ** 早田文蔵先生の命名発表以後、伊藤武夫氏の図説及び緒方正資氏の図譜に載り、伊藤洋氏が大日本植物誌オシダ亜科 (1939年) でイヌタマシダ節の1種として解説され、百瀬静男氏がその前葉体を研究し、植物研究雑誌16巻(1940年)に、ナガバノイタチシダの前葉体との区別を報告され、秦仁昌氏は1938年にミヤマイタチシダの近縁種として触れている等の研究はあるが、その正体がどうもすつきりしない。而してその分布は台湾特有种と通常考えられて来た。これを日本のフロラで始めて問題にされたのは杉本順一氏で、日本シダの会々報24号(1956年)に屋久島産を紹介されている。即ち、1956年の夏に私は杉本氏等と屋久島へ渡り、小杉谷一花ノ江河間にて同行の渡嘉敷裕氏が1種異様なナガバノイタチシダを採集し、一同大いに驚いたのであるが、その翌日小杉谷附近にて同様の羊歯を多数見ることができ、結局ナガバノイタチシダとの区別が非常に難しいことが分つた。その後、杉本氏はこれを台湾のクロミノイタチシダと同定された訳である。私は屋久島のものを数年間栽培観察し、また1959年には大隅半島の花瀬にそれと思われるものに気付き、これを小石川植物園に栽培して頂いた。更に川畑政親氏は屋久島から豊富に標本を送つて下さつた。これらを研究した結果、杉本氏と同一見解に到達した。本羊歯はとにかくナガバノイタチシダに酷似するが、なお、(1)葉身が巾広く卵形をなし、3回羽状~4回羽状深裂に深く切れること、(2)最下羽片は巾広く大きいこと、(3)葉柄鱗片はやや密に生じ、巾広く狭卵形~披針形であること等により区別し得るものと考えに至つた。しかし、勿論別種のものとは思われず、若葉の葉柄・葉軸・羽軸等に白色の細腺毛を密布する特性も両者は良く一致する。その学名については *D. sparsa* のグループに私には未解決の点が多いので今は触れず、ただクロミノイタチシダに今後の皆様の注意を喚起したい。検し得た本羊歯の標本産地は、大隅肝属郡田代村花瀬 (倉田悟, 1959年)、大隅屋久島花ノ江河一小杉谷 (渡嘉敷裕, 1956年)、同荒川 (倉田, 1956年; 川畑政親 no. 560)、同太忠 (川畑 no. 507)、同麦生 (同 no. 315)、同高平 (同 no. 817, 818)、台湾東大演習林 (寒河江幸正, 1940年) 等である。

(88) **ヤマナカシダ** (新称) 1960年の秋に鹿児島県大口市の山中鉄次氏から、同地産の異様なシダ標本を頂いた。一見ナガサキシダモドキに似ているが、側羽片は数多く8対あり、しかも葉身は先端へとやや急ではあるが次第に狭まり、はつきりした頂羽片を形成せず、従つてこの頂羽片らしき部分が巾広く、また、側羽片は深く裂けることなく重鈍鋸齒様に波状浅裂するのみで、羽片の中央部附近の鋸齒が深く、基部の鋸齒が反つて浅い点により、はつきり異なつていた。その後1961年の夏、山中氏の宅を訪れ栽培されている該羊歯を見ることができた。同行された城戸正幸氏は一見ツクシイワヘゴとの近似性を強調されたが、全くその通りで、葉柄鱗片は最基部のものが褐色であることを除けば良くツクシイワヘゴに一致し淡黒色で巾狭く、頂羽片の明瞭でない点もツクシイワヘゴに近付いた性質である。生時、葉質は厚くほぼナガサキシダに一致するが、腊葉では脈がそれよりはつ

きり見え、側脈基部の羽片中肋への流れ方が少ない。また包膜は小さくソーラスの半ばを被うに過ぎない。側羽片は柄が比較的短かく、殆んど鎌状に曲らず真直ぐに伸びている。以上の諸性質を総合すると恰もナガサキシダとツクシワヘゴの中間的な性質を示すものと言える。或いは両種の雑種かも知れぬが、特徴の大変はつきりした著しいシダであるから新種として記載する。今の所、唯1株発見されているのみであるが、この興味深いシダに注意された日本シダの会の有力会員である山中氏に敬意を表し、ヤマナカシダと命名する。

(89) **ヒロハナライシダ** 本羊歯はナライシダから通常、(1)裂片が広く、(2)葉柄・葉軸・葉裏に鱗片が殆んど無く、(3)包膜の辺縁に長毛を有することにより区別される。しかし、ナライシダにおいてもその南方型は北方型(ホソバナライシダと呼ばれるもの)に比し、裂片が広く鱗片が少なくなり、一見した所ヒロハナライシダと区別が無い。奈良県吉野郡上北山村の池峯神社の境内には、このナライシダ南方型と真のヒロハナライシダが混生し、1株1株包膜を調べないと何れとも判断できなかつた。しかもヒロハナライシダの包膜の有毛程度には変化があり、典型品は多数の縁毛を有するが、1~4本位の縁毛しか出ない個体があつて、縁毛の全く出ないナライシダから別種として分けることは無理であると判断された。日本では始め小泉源一氏がナライシダの変種として発表されたのであるが、私はその御意見に賛成である。検し得たヒロハナライシダの標本産地は、大和吉野郡下北山村前鬼口(倉田悟, 1960年)、同池峯(同)、丹波水上郡妙高山(岩槻邦男, 1953年)、肥後市房山(乙益正隆, 1959年)、肥後球磨郡錦村大平山(前原勲次郎, 1958年; 倉田悟, 1961年)等である。四国及び中国地方には未発見である。なお、緒方正資氏の図譜第3巻(1930年)に図示されたナライシダの包膜は縁毛があつて、恐らくヒロハナライシダの包膜であろう。

(86) **Dryopteris indusiata** (MAKINO) MAKINO et YAMAMOTO ex YAMAMOTO var. **purpurascens** (H. Iro) KURATA, comb. nov.

Dryopteris erythrosora (EAT.) O. Ktze. var. **purpurascens** H. Iro in Bot. Mag. Tokyo 50: 69 (1936).

Dryopteris purpurella TAGAWA in Acta Phytotax. Geobot. 1: 307 (1932); Col. Ill. Jap. Pterid. 104 et 212, fig. 216 (1959); OHMURA in Hokuriku Journ. Bot. 7: v, pl. 18 (1958).

Distr. Honshû (Provs. Izu ? and Kii), Kyûshû (Provs. Hizen, Higo, Satsuma, Ohsumi and Yaku-island) and Ryûkyû (?).

The most easily understandable form of this variety has purplish stipes and rachises, shortly petioled and more or less erecto-patent pinnae, and submarginal sori. There are, however, so many intermediate forms between this fern and the typical *Dryopteris indusiata* in southern Kyûshû, that it is considered to be appropriate to regard the former as a variety of the latter.

(87) **Dryopteris melanocarpa** HAYATA, Icon. Pl. Formos. 4: 163, fig. 104

(1914); T. ITO, *Zoku Taiwan Shokubutsu Zusetsu* pl. 107 (1928); OGATA, *Icon. Fil. Jap.* 6: pl. 269 (1935); H. ITO, in NAKAI et HONDA, *Nov. Fl. Jap.* 4: 30 (1939), *Fil. Jap.* III. pl. 232 (1944).

Hab. Kyūshū: Hanaze, Tashiro-mura, Prov. Ohsumi (S. KURATA, Oct. 1959); Kosugidani, Yaku-island, Prov. Ohsumi (Y. TOKASHIKI, Aug. 1956).

Distr. Formosa and new to Japan.

This is one of the most elusive ferns, and probably it will be elucidated that this fern is only a form of *Dryopteris sparsa*. The author, however, has not yet well realized the real *Dryopteris sparsa*. In Yaku-island we can find *Dryopteris melanocarpa* at higher elevation than the so-called *Dryopteris sparsa*.

(88) *Dryopteris Tetsu-Yamanakae* KURATA, sp. nov.

Rhizoma crassum erectum, frondibus ca. 3 in apice rhizomatis fasciculatis. Stipes stramineus, 23-33 cm. longus, ad basin dense sursum parce squamatus, squamis atro-brunneis, rigide membranaceis, lineari-lanceolatis usque ad subulatis, apice longe acuminatis, margine sparse setulosus, infimis brunneis maximis ad 1.7 cm. longis 3 mm. latis. Lamina in ambitu ovata, apice abrupte contracta acuminata, pinnata, sursum profunde pinnatifida, 45-52 cm. longa, 35-40 cm. lata, textura statu sicco chartacea vel subcoriacea, rachide squamis subulatis usque ad fibrillosis parce vestita, pinnis lateralibus 7-9-jugis, patentibus vel paulo ascendentibus, anguste lanceolatis vel linearibus, apice acuminatis basi rotundato-truncatis vel latissime cuneatis, grosse crenato-lobatis, supra sparsissime fibrillosis subtus parce fibrillosis, inferioribus 17-21 cm. longis, 2.5-3.5 cm. latis, inter se 3.5-5.5 cm. remotis, lobis in parte media pinnae maximis, apice obtusis vel rotundatis, margine subintegris vel paucidenticulato-serratis, venis venulisque subtus distinctis supra plus minusve obscuris, venis inter se 5-7 mm. remotis, venulis ca. 3-4-jugis simplicibus. Sori prope costam pinnae utroque 2-4-seriatim dispositi, rotundati, 1.0-1.5 mm. lati, indusiis parvis, rotundato-reniformibus, marcescentibus, sporis ignotis.

Hab. Kyūshū: Sasano, Ohguchi-shi, Prov. Satsuma (T. YAMANAKA, Sept. 1960.—the type in Herb. Fac. Agr., Univ. Tokyo).

At a glance, this very interesting fern looks like a multipinnate form of *Dryopteris Sieboldii* var. *Toyamae*, which differs from this by the broader and brownish scales on the stipe, the deeply dissected lateral pinnae and the larger indusia. Perhaps this new fern may be a hybrid between *Dryopteris commixta* and *D. Sieboldii*. At any rate, it is noticeable that this fern is situated between the Subgen. *Eudryopteris* and *Pycnopteris*.

(89) *Leptorumohra Miqueliana* (MAXIM.) H. ITO var. *fimbriata* (KOIDZ.) KURATA, comb. nov.

Dryopteris Miqueliana var. *fimbriata* KOIDZ. in MAEBARA, Fl. Austro-Higo. 5 (1931); in Acta Phytotax. Geobot. 1: 28 (1932).

Rumohra sino-Miqueliana CHING in Sinensia 5: 65, pl. 15 (1934).

Leptorumohra sino-Miqueliana (CHING) TAGAWA in Acta Phytotax. Geobot. 8: 232 (1939).

Polystichopsis sino-Miqueliana (CHING) TAGAWA in Journ. Jap. Bot. 33: 95 (1958); Col. Ill. Jap. Pterid. 88 et 245 (1959).

Hab. Honshû: Ikemine, Shimokitayama-mura, Yoshino-gun, Prov. Yamato (S. KURATA no. 679, 703, Jun. 1960); Mt. Myôkô, Hikami-gun, Prov. Tanba (K. IWATSUKI no. 949, Aug. 1953).

Distr. Central China and Japan (Kyûshû and new to Honshû).

The southern form (form. *narawensis*) of *Leptorumohra Miqueliana* var. *Miqueliana* agrees with this variety in all characteristics but its glabrous indusia. The indusia of this variety are ciliate at the margin.

倉田 悟 ベニシダの北限産地

S. KURATA : The Northernmost Habitat of *Dryopteris erythrosora* (EAT.) O. KUNTZE in Japan.

田川図鑑 (1959年) にはベニシダにつき、関東以西に広く分布すると書かれているが、東北地方南部へ侵入していることはよく知られている。

日本海側では秋田県に達しているかどうかは不明だが、山形県では加藤信英氏の調査により各地に自生することが判明しており、私の手元には西田川郡大山町善宝寺 (加藤信英, 1958年), 東田川郡藤島町 (同) の標本がある。

太平洋側では宮城県本吉郡志津川町の樺島が北限産地として有名で、三陸植物志 (1935年) 等に明記されている。最近、私も同島に渡る機を得、タブ・ツバキ林下に散生するベニシダを実見した。しかし更に引続き訪れた岩手県釜石市東北方海上にある三貫島でもベニシダを採集し、その新北限産地を確認した。三貫島には従来、ミヤマベニシダを産するとの記録があるが、このベニシダを誤認したものであろう。ベニシダは日本の代表的な暖帯性羊歯で、東北地方では海岸沿いに点々と北上している訳だが、明確な分布状態を調べ出したいものである。

なお、南方は九州の屋久島に達し、大隅半島と屋久島には更にホコザキベニシダへの移行型を多産し、奄美大島以南にはホコザキベニシダを産するのみで、真のベニシダが見られない。